信じるということ

飄々

広報委員

藤村　智之

小児科医院を営んでいると、しばしば子どもの採血を行う場面がある。

先日のこと。看護師である私の妻が５歳の男の子の採血をすることになった。一般的に子どもは針を刺される恐怖から手足をばたつかせたりすることがあるので、予め体を縛りつける拘束バンドで巻きつける。しかし、その子は恐怖に怯えながらも「体を縛りつけないで」と懇願したため、彼女はその子の訴えを聞き、拘束バンドをつけずに採血を行い、その子は頑張って泣くのを堪えて採血を受けたと。

私はすごい話だな、と２人を褒めた。彼女は「子どもを信じてあげるのよ」と言った。その言葉にハッとさせられた。

別日。診療中、母親から相談を受けた。

１歳９か月になるが、まだほとんど自発語がない。また、全く落ち着きがないが大丈夫かと。先に受けた１歳半健診で、発達の遅れを疑われたと。見たところ、診察室の周りを歩き回ったりして、一時もじっとしていない様子。しかし、おもちゃに興じたり、物を指さしたりといかにも１歳児らしい仕草である。ところで、私の長男はもう成人しているが、３歳の誕生日まで１語も話さなかった。同僚の小児科医からも心配されたが、誕生日を過ぎてから急に発語が始まった。その後、大学を卒業し今では普通に社会人として生活している。今は彼の人生に親として何も心配していない。そんなことも母親に話し、もう少し様子を見てみましょうと伝えた。

最近は、子どもが行方不明になったり、殺されたりと物騒なニュースも多い。そして、発達障害と診断される子も増加している。親たちは発達が遅れるのではないか、病気になるのではないか、一人で生きて行けるのだろうかとついつい子どもの現在や将来を心配してしまう。しかし、そんな時にこそメディアの情報に不安がったりせず、目の前の「子どもを信じる」ということが大切なのではないかと思う。そして、良い意味で子どもから心を離すことも大切であると思う。

自動車保険・火災保険・交通事故傷害保険
医師賠償責任保険・所得補償保険・傷害保険ほか
あなたにしあわせをつなぐ
損害保険ジャパン株式会社 代理店
共栄火災海上保険株式会社 代理店
山福株式会社
TEL 083-922-2551